

### 〈開拓者の情熱〉と〈教育者の視点〉

今から30年ほど前、弘前高等学校の図書館に「加藤文庫」という小さなコーナーがありました。『少年倶楽部』や漫画『のらくろ』の復刻版が並んでいましたが、校内で顧みる人はほとんどありませんでした。当時、同校に勤務していた私は、そこで初めて佐藤紅緑の「あゝ玉杯に花うけて」を読み、その時の衝撃は今でも忘れることができません。

しかし、「加藤」という人物が、〈昭和の名編集長〉と謳われた加藤謙一であり、弘前高校の前身である旧制弘前中学校を卒業したこと、戦後間もない昭和22年に『漫画少年』という〈伝説の雑誌〉を創刊したことなどは知ることがありませんでした。

今回、企画展「名編集長・加藤謙一」を準備する中で、手塚治虫の「ジャングル大帝」が『漫画少年』に4年半も連載された看板作品であったこと、寺田ヒロオ・藤子不二雄・石ノ森章太郎・赤塚不二夫といった名だたる漫画家たちが同誌の漫画投稿欄から育っていったこと等々、多くの〈驚き〉がありました。この〈驚き〉を観覧者の方々にも感じ取っていただければと思っています。

### 入館者の声

- ・石坂についてよく知れた。青森県民として誇りに思う。(鶴田町・女性)
- ・(石坂展について)すばらしい展示でした。図録もあるのがうれしい。(岩手県・男性)
- ・(加藤展について)今まで誰にも知られていなかった人物に焦点を合わせた企画展で良かった。(大鰐町・男性)
- ・太宰と石坂は愛読してきました。他の文人を知るきっかけにもなり、有意義な時間を過ごせました。(県外・女性)

### 加藤謙一展の図録を販売しています!

弘前市立郷土文学館 第42回企画展 「名編集長・加藤謙一」  
—『少年倶楽部』から『漫画少年』へ—

一つの信念を胸に時代を駆け抜けた伝説の編集長がいた。 ¥500

さて、加藤が学んだ青森県師範学校の後身は、現在の弘前大学教育学部です。その弘前大学の構内に、平成22年に加藤謙一の記念碑が建てられました。そこには、加藤の終生変わることのなかった信条が刻まれています。

**「子どもは国の宝だ 子どもたちを明るく  
健やかに育てる仕事に 身を捧げたい」**

上京して出版社に就職するまでの苦節3年、人気挿絵画家のライバル誌移籍による『少年倶楽部』の売り上げ激減、戦後の講談社辞任と公職追放、『漫画少年』創刊時の返品如山など、幾多の困難を乗り越えた加藤謙一の〈開拓者の情熱〉と〈教育者の視点〉を、展示資料や解説パネルを通して読み取っていただければと思います。

最後に、本企画展の開催にあたり、加藤謙一の御子息・加藤丈夫氏をはじめ、地元の弘前大学附属図書館、青森県近代文学館、横浜の大佛次郎記念館、東京豊島区の皆様など多くの方々のお世話になりました。心より感謝申し上げます。

(企画研究専門官 榎引洋一)

### 平成30年度 北の文脈文学講座のお知らせ

5月から12月の各月第3土曜日、  
午後2～3時まで。  
文学館2階ラウンジで開催いたします。  
8月の企画展記念講演会、10月の講座は図書館2階視聴覚室を予定しております。

### 新企画

### ラウンジのひととき

5月から12月の第1土曜日、  
午後2～3時まで。  
文学館2階ラウンジで開催いたします。  
文学館での初の試みとなります。朗読会、コンサート等様々な催しを予定しております。  
文学に興味のある方もそうでない方もお気軽に遊びにきてください。



### 第42回企画展

## 「名編集長・加藤謙一」 —『少年倶楽部』から『漫画少年』へ— 開催中



加藤謙一 (1896～1975)

加藤謙一(1896～1975)は、明治29年に弘前市に生まれました。大正6年、富田尋常小学校に訓導として着任。自らが編集した学級誌『なかよし』が生徒たちの好評を呼び、「子どもの雑誌は教育者の視点で作るべき」との思いを強くして上京します。

大正10年、大日本雄弁会講談社に入社。『少年倶楽部』の若き編集長として奮闘し、佐藤紅緑の「あゝ玉杯に花うけて」の連載を実現させます。また、別冊付録や漫画「のらくろ」「冒険ダン吉」の連載など「おもしろくてためになる」雑誌作りに努め、『少年倶楽部』の黄金時代を築きます。

その流れは、戦後に創刊した『漫画少年』(学童社)に受け継がれ、手塚治虫の「ジャングル大帝」を世に出し、戦後を代表する多くの漫画家がそこから生まれ育ちました。

本展は、「昭和の名編集長」とうたわれ、少年文化の大きな担い手であった加藤謙一の79年の生涯と業績を紹介するものです。

開催初日は、弘前ペンクラブ会長・斎藤三千政より企画展開催に際しての挨拶の後、榎引洋一企画研究専門官の解説により展示室をご案内させていただきました。また、1月23日には加藤謙一の四男で国立公文書館館長の加藤丈夫氏が来館されました。

今回の展示では展示室入口すぐ右手に展示のポイントを伝える大型パネルを設置いたしました。こちらは郷土文学館の初の試みとなり、大変ご好評いただいております。ウォールケースでは、加藤謙一の生涯と業績をゆかりの資料や『少年倶楽部』『野球少年』『漫画少年』などを展示しながら紹介しております。各コーナーでは、『漫画少年』創刊号のレイアウト、



手塚治虫や大佛次郎の書簡、色彩豊かな『講談社の絵本』、加藤謙一の日記等を展示しており、特に『少年倶楽部』の付録「軍艦三笠の大模型」が注目を集めています。さらに、映像コーナーでは戦前戦後を駆け抜けた加藤謙一の生涯と業績を約20分で紹介しております。

今回の展示は、文学愛好者のみならず、子どもから大人まで多くの方々を楽しめる内容となっております。開催期間は12月28日までです。ぜひご覧ください。



### 加藤謙一と佐藤紅緑

大正14年、講談社の人気画家であった高島華宵が『少年倶楽部』のライバル誌である『日本少年』に移ってしまうという「華宵事件」が起きました。「雑誌は絵で売らんじゃない。読み物で売らん」と講談社初代社長・野間清治に叱咤激励された謙一は、同郷の先輩である佐藤紅緑を頼ります。

当時、飛ぶ鳥を落とす勢いの人気作家だった紅緑は、「なにッ、このおれにハナたれッ小僧の読む小説を書けというのか」と激怒しますが、謙一は、「文壇には恋愛小説を書く作家は掃いて捨てるほどいるが、だじな子どものためにひと肌ぬいでくれそうな作家はひとりも見当たらない、先生ならばわかってくれる人と思ってきたが、そんなにご立腹では話にならぬ。(中略)先生はハナたれ小僧といわれるが、子どもは国の宝ですぞ。ハナたれ小僧がよくなると日本の国はよくなるのです」と切り返します。

紅緑への説得は結果的に成功し、『少年倶楽部』で連載された「あゝ玉杯に花うけて」は、日本中の少年を熱狂の渦に巻き込みました。

紅緑は、「玉杯」が終わった後も「少年讃歌」「英雄行進曲」「一直線」などを連載し、少年小説作家として名を残すこととなります。

また、紅緑は『少年倶楽部』の編集についても様々なアドバイスをしており、「もっと漫画を載せたらどうか。漫画は家中みんなで読めるし、なにより誌面が明るくなるからね」という言葉が、「のらくろ」や「冒険ダン吉」など、あたらしい漫画の登場へと導きます。

紅緑は謙一を息子のように可愛がり、その交流は紅緑が亡くなるまで途切れることなく続きました。

参考：『少年倶楽部時代』（加藤謙一著・講談社）  
『「漫画少年」物語』（加藤丈夫著・都市出版）



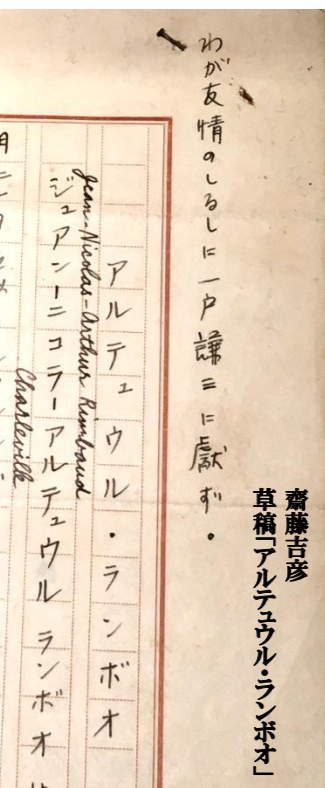
左から佐藤紅緑、一人おいて加藤謙一  
(青森県近代文学館提供)

### スポット展 新収蔵資料展

明治37年(1904)年、弘前市に生まれた齋藤吉彦は、我が国の民俗学開花期に柳田国男、折口信夫に強い影響を受けて民俗学、語学を志し大いに将来を嘱望されましたが、病に倒れ、惜しくも26歳で早世しました。

本展は、当館に寄贈となった詩人・一戸謙三の旧蔵資料から、齋藤吉彦の草稿、書簡など、『齋藤吉彦全集』未収録の資料を中心に展示・公開しております。

吉彦と謙三、そして石坂洋次郎との交流を伝える貴重な資料となっています。



### 新資料紹介

一戸謙三はがき・齋藤吉彦宛  
(昭和3年11月24日付)

謙三のフランス語での最初の手紙で、『齋藤吉彦全集』未収録の資料。

(訳文)

私のフランス語での最初の手紙。

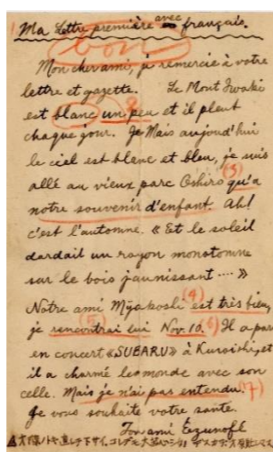
親愛なる友人へ、手紙と新聞をどうもありがとうございます。

岩木山は少し白く、毎日雨が降っています。

でも今日は、空は白く、青く、私は私たちの子どもの頃の思い出の古いお城の公園へ行きました。

(中略) あなたの健康を願っています。

君の友達 エズノフェ



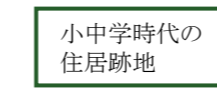
### 文学散歩「石坂洋次郎ゆかりの地を訪ねて」

《講師 齋藤三千政》

〈平成29年11月3日(金)文化の日〉当日は晴天に恵まれ、集まった13名は追手門広場を出発しました。「団体行動だからと気負わず、散策を楽しんでください」という講師の言葉通り、ゆったりとしたペースで石坂ゆかりの地を巡りました。



この交差点の坂下が幼少期の石坂の遊び場だった



小中学時代の住居跡地



石坂洋次郎 佐藤紅緑文学碑



佐藤紅緑顕彰の碑

〈散策コース〉 文学館前→朝陽尋常小学校跡地→洋次郎住居跡→陸羯南生誕の地→朝陽小学校文学碑→貞昌寺・石坂家の墓(休憩)→鏡ヶ丘記念館(弘前高等学校内)→最勝院(五重塔)→富田尋常小学校跡地



追手門広場にて出発前の自己紹介

〈文学散歩こぼれ話〉  
石坂洋次郎が小中学時代住んでいた塩分町の家は、下町に降りる新町坂のすぐ上の住宅街にあったという元家老の家で、屋敷も家も近くのそれらに比べるとグンと広がった。新町坂の急なカーブに、かつてはさいかちの老木がそびえており、そこから道のない絶壁のような傾斜を滑り降りると、新町川の岸に出る。そう深くも広くもないだけに、子供達にとっては、魚をとる、泳ぐ、と絶好の遊び場だった。川の向こうは下町の一部と広い水田で、水田のはるか向うには形のいい岩木山が見はらせる。  
参考：『現代日本文学アルバム 石坂洋次郎』(学習研究社)



貞昌寺 石坂家の墓



鏡ヶ丘記念館(県立弘前高等学校内)



最勝院(五重塔)

当日は、石坂洋次郎ゆかりの地についてのお話、郷土の作家に関するエピソード等を交えての解説を聞きながら散策しました。また、貞昌寺のご厚意で休憩を取ることができ、参加者も美しい秋の庭を眺めながらホッと一息できました。

〈文学散歩最終地点〉  
第42回企画展で紹介する加藤謙一が教員をしていた小学校跡地に解説がありました。

